

## 歴史的資産を活かしたまちづくり—エビス像が果たす役割—

佐賀大学 学生会員 西 康彦  
 佐賀大学 正会員 外尾一則  
 佐賀大学大学院 学生会員 猪八重拓郎

## 1. 研究の背景と目的

佐賀城下町の東西に走っている長崎街道では、町の角々や辻にたくさんエビス像が見られる。その数は市内全域で約370体、一つの町にあるものとしては日本一である。佐賀市のエビス像について人文系諸学の研究はいくつかみられるものの、都市空間における諸要素とエビス像との関わりという視点からの研究は見られない。このような背景から本研究では、佐賀市内を対象にエビス像がその造立年代である江戸期に城下町構造とのかかわりの中で果たしていた役割に対する考察を行うことにした。

## 2. 研究の位置付け及び対象

歴史的資産を扱った既存研究には多種多様なものが見られる。本研究では都市の魅力を形成するひとつの要素として歴史的資産を位置づける。エビス像と都市とのかかわりについて像立地が最も多くなされた時期、江戸期の都市構造との関連分析を行う。本研究における対象地区は佐賀県佐賀市伊勢町とした。佐賀城下町においてエビス信仰が最も広がりを見せた町人地属性を持つ地区であり、町名の由来ともなった町内に立地している伊勢神社境内にエビスが祭祀され、現在も春・夏・秋に行われる同神社の例祭と共にエビス祭りが行われている。以上のことを踏まえて、本研究の対象として設定した。

## 3. 調査・分析結果及び考察

## 3-1: エビス信仰

元来、エビス信仰は漁民の間に発生した信仰であると考えられていて、今日でも漁村におけるエビス信仰には根強いものが見られる。漁村においては、鯨やサメ・イルカなどをエビスと呼んでおり、また海難者の死体や海中から拾い上げた石、あるいは海岸に流れ寄せてくるものをエビスと呼んでいるところもあるように、様々なものを通じて海から訪れてくる神霊で幸を与えてくれるものがエビスであるという考えが共通して見られる。これらの事からもエビスとは豊漁をもたらす神として海中より出現した神、つまり漂着神としての信仰が濃厚であるといえる。このような信仰の形が都市に伝播した結果、異郷からやって来る幸を商業に結びつけた神として信仰がなされていた。佐賀市内に祀られているエビスが商業神としての性格を強めていたことは間違いないであろう。市内におけるエビス像の造立年代については、台座に刻まれた紀年銘等から推測されるのが現状である。紀年銘の最も古いエビス像は1669年江戸時代初期に造立されている<sup>1)</sup>が、この頃の紀年銘があるものは極めて少なく、18世紀後半より19世紀前半にかけて数的にかなり増



図1: 街道に立地するエビス像

加、それと共に庶民の間にエビス信仰が急速に広まっていった。この時期は城下町佐賀の賑わいをもっとも見られた時期であり、長崎と小倉をつなが長崎街道の往来も活発であった。当時エビスがその信仰の形により、商業だけでなく異郷から来る存在に対するの畏怖を込められて造立されたものであると考えることは十分に可能である。このことから異質な存在を区別する守り神としてのエビス信仰のかたちが見受けられる。

## 3-2: エビスと都市の歴史

空間構成要素としてのエビスとコミュニティーのありようを明らかにする為、聞き取り調査を実施した、

伊勢神社とエビス像に関しては、同神社の職員の方に調査を行った。境内に奉祀されている、伊勢恵比須神社設立に関しては長崎街道の要路に当たり往年、繁栄を極めた伊勢屋町（現伊勢町は当時5つの町に分かれていた）の氏子が商売繁盛を祈願し周囲のエビス信仰の高まりに後押しされる形で、エビス石像をご神体として祭祀したものであった。つまりこのことはエビス像造立のピークである江戸期の伊勢町ではエビス像を地区のシンボルとして、他地区との差別化を図るための存在であったと考えられる。また城下町佐賀における伊勢町の町割りについては自治会長に対してヒアリングをおこなった。前述したように江戸期の伊勢町は5つの異なる性格を持つ町より構成されていた。図2に示される伊勢屋町・伊勢屋本町は宿場町、点合町は多くの職人たちが住む街であった、また岸川町は寺院が立ち並ぶ寺町、そして駄賃町は荷駄を運ぶ馬（駄賃馬とよばれる）を繋ぐターミナル機能を持っていた、というように各地区の多様性を見出すことができた。



図2：対象地区の町割り

### 3-3：エビスを取り巻く空間構造

城下町の町割りと街路の関係に注目してみる。当時（江戸期）の各地区は一本の街路を中心として町屋および武家屋敷、そして寺社地が広がっており、それらに与えられた多様な機能の集積としての各町割りがなされていたと考えられる。つまり街路が果たしていた役割は各町割りを貫く構造をとっていることから、異なる都市空間を結びつける役割を果たしていたと考えられる。一方、図3を見てみると街路に散らばっているエビス像は、前述した多様な空間の節点として、街道を主とした街路の交点に多く立地している。また伊勢町以外の町とのかかわりを見ていくと、図3左下に伸びる二本の正丹小路と呼ばれる武家地につながる街路、そして同図右下に伸びる川原小路、これも同じく武家地と町人地をつなぐ街路であるが、いずれの交点にもエビス像の立地が見られる。また図3右上の寺町であった岸川町の入り口と当時城下町の外れであった多布施町を隔てる点にも像が立地している。以上のことより像の存在は江戸期都市空間、とりわけ各町割りと街路の持つ機能を分化する役割を示していた存在であると考えられる。

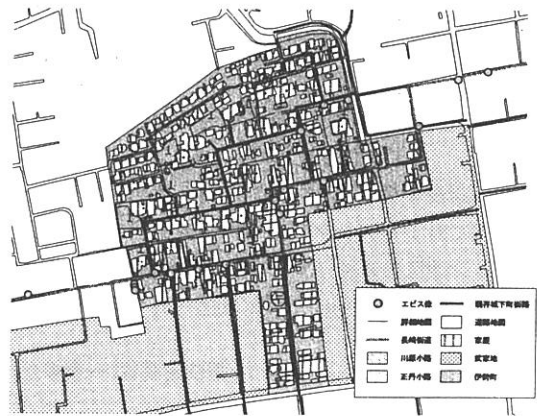


図3：城下町構成要素とエビス像

## 4. まとめ

本研究により、エビス信仰のかたちと各地区の有り様、そして城下町街路網に立地しているエビス像の立地特性を考察した。像が城下町という有機的な発展を遂げた地域において、異なる都市機能の分節点としての役割の一部を果たしていた事が把握できた。歴史を伝えるものとしてのエビス像を考えたときその役割は現代に生きる我々にとって、かつての意味とはまた違った新たな役割を担ってゆくことであろう。そして歴史を伝えるものを活かした街づくりが行われていくことこそが都市の固有性を創出することにつながるのではと考える。

1) 参考文献「佐賀のエビス」 佐賀市教育委員会編